京都工芸繊維大学

氏　　　名	きょう　き JIANG QI
学位(専攻分野)	博　士　（学 術）
学 位 記 番 号	博 甲 第　1121　号
学位授与の日付	令和 6 年 3 月 25 日
学位授与の要件	学位規則第 4 条第 1 項該当
研 究 科 ・ 専 攻	工芸科学研究科　デザイン学専攻
学 位 論 文 題 目	**ポストメディア時代のメディアアートにおける受容者の参加と共同体の形成の役割**
審　査　委　員	(主査)教授　中野　仁人 教授　櫛　勝彦 教授　平芳　幸浩

論文内容の要旨

メディア技術やメディア環境が変化し続ける中で、メディアアートも新たな美学、芸術学のメカニズムによって再定義され、再解釈されつつある。多様な要素を内包するメディアアートにおいて、個人の特異性を保持しながら、受容者と創作者の共同体を形成し、その参加の役割を考察し、新たな理論の枠組みを構築することが目指される。本研究の目的は、歴史的な側面の検証に基づくメディア考古学を導入し、ポストメディア時代におけるメディアアートの特性、とくに受容者が関与し参加するタイプのメディアアートの可能性を再考することである。

第 1 章では、メディアの概念を体系的に分析し、特にメディアの歴史や過去のメディアに関する複雑性を軽視する進歩主義の傾向を見直し、異なる文脈を比較、分析することによって、「メディア」という概念を時間、分野、地理を超えた包括的な視点から検証しており、人間の相互作用、創造性、コミュニケーションにおけるその重要な役割を明らかにしている。そして「メディア」の永続的な意義と適応性を強調し、社会構造や個人の表現を形成する上での重要性を示している。フェリックス・ガタリの「3 つのエコロジー」という概念を取り上げ、人間の主体性の異質性が、個人による情報の解釈、再構築、発信のプロセスにどのような影響を与えるかを観察する。

第 2 章では、学際的な研究分野としてのメディア考古学の発展と範囲を掘り下げ、その起源、応用、先駆的な研究者たちによって確立された理論的枠組みをたどっている。映画考古学、フリードリヒ・キットラーのメディア物質性、メディアテクノロジーとアートの相互作用、ジークフリート・ツィーリンスキーのメディア異質性の利用など、メディア考古学における主要な理論を紹介し、メディアアートの創作とアーカイブプロセスの可能性を探っている。

第 3 章では、1983 年に制作された中国のアニメーション作品『天書奇譚』を取り上げ、デジタル化が進む中でのその変遷を系統的に調査する。『天書奇譚』の 4K 修復版とその 2021 年の再上映が、中国のメディア環境における劇的な変化を如実に示している。本研究では、このアナログからデジタルへのメディア転換が社会的行動、生活様式、および価値観に及ぼした影響を明らかにし、情報の受容者が受動的な受け手から能動的な参加者へと移行する様子を解明する。この変化はメディアコンテンツの再評価を促し、過去に忘れ去られた作品に対する新たな関係性や、新しい社会的結びつきを生む原動力となる。デジタルメディア環境では、受容者はハイパーリンクや

タグ、検索機能といった機能を使い、自分の好みや興味に応じて能動的に情報を選択し、体験することができる。この新しいメディア環境では、受容者は能動的な参加者となり、独自の視点や関心を通してコンテンツを活用する。メディアの自由度が高まることで、伝統的な文化やスタイルを保存・維持しながら、新しい文化的価値や意味の創造を促進することが強調される。双方向性と情報への選択的アクセスを重視する現代は、個人がどのように芸術鑑賞や創造に参加し、貢献するかに大きく影響している。受容者がメディアアートに与える影響は、メディアアートを解釈し、共同体を形成する上で不可欠な役割を浮き彫りにし、重要な議論のテーマとなっている。

第４章ではジョージ・ハーバート・ミードとチャールズ・クーリーの理論に基づき、メディアとの相互作用を通じて受容者がどのように社会的言説を解釈し、メディアアートに参加することで自己アイデンティティと自己意識を形成するかを検証している。個人から共同体への移行が自己構築プロセスにおいて重要な役割を果たしているとし、ガタリの異質な主体性理論に基づき、共同体内の個人の多様性が共有目標を持つ複雑な共同体形成に不可欠であると主張する。参加型アートをメディア考古学的な視点から掘り下げ、受容者の役割の重要性を明らかにし、メディアアートがどのように発展してきたかを考察する。さらに、ジャン＝リュック・ナンシーの参加型ピラミッドモデルを用いて、共同体の形成と受容者の参加度合いを分析し、「k-means クラスタリング」、「階層クラスタリング」、「ファジィ c-means 法」という３つの統計的手法を使用して、メディアアートを「受動型アート」、「参加型アート」、「共同創作型アート」に分類している。このアプローチは、メディアを介したアートにおける創作者、受容者、そしてその間のダイナミックな関係について新たな視点を提供し、より複雑な分類を可能にする。

第５章では、４章までの考察をもとに、受容者の参加度合いと共同体の形成がメディアアートに及ぼす影響について、3 つの事例と実践を通じて考察している。それによりメディアアートにおける創造性と受容者の関与がどのように相互に作用し、新しいアートの形式や文化的な意味をどのように生み出すかを明らかにする。提供される体験や参加は、個々の主観的経験を踏まえつつ、それを共同体や社会的文脈の中に位置付けることで、メディアアートのより包括的な理解を促進するとする。

論文審査の結果の要旨

本論文は、ポストメディア時代のメディアアートの現状に対し、詳細な分析と考察を行ったうえで、

メディアアートとその受容者と創作者によって形成される共同体が、メディアアート自体とそれを取り巻く社会文化に与える影響について探求している。　本論文の特筆すべき特徴は以下の点である。

第一に、技術の発展、社会の変化に応じて拡張し続け、国や地域によって解釈が異なる現在のメディアアートの概念を整理し理解を深めると同時に、メディアアートの創造に必要な新しい理論的基盤を提供している。メディアが満ち溢れる現代社会において、この研究アプローチはメディアアートを再考し、新しい視点と方向性をもたらすものである。

第二に、メディア考古学を援用し、ポストメディア以後のメディアアートの分析を進めている。

メディア考古学は、例えば従来のフィルムメディアと現代のデジタル映画形式との間の変容を対比することで、特定の時代や文脈におけるメディア表現を保持する。それはその時代の文化や社会を理解することに有用であり、過去のメディア形態の再評価や、現代のメディアにおける新しい表現方法の発見に繋がる。そのことはすなわち、メディアアートの制作において多様な考え方やアプローチを提案することを意味しており、アーティストたちが新しい形式や表現方法を探求する際の重要な指針となる。

第三に、メディア考古学に対する体系性の欠如という批判に対処するために、ポストメディア時代の特徴である多種多様なメディア形式の混在と、異なる受容者や視点の多様性に注目している。この枠組みを用いて、今日のメディアアートを参加型メディアの形態として捉え、その多様性と複合性を詳細に分析している。それによりメディアアートが単なる観賞対象から、体験的活動へと変わる過程において、受容者が作品に積極的に関わることの意義を考察している。共同体の形成が、作品の深い理解と鑑賞を促すだけでなく、社会的な対話や新たな文化的意味の創出に寄与することを明らかにしている。

上記のように、本論文は多くの文献調査と広範囲にわたる慎重かつ緻密な調査作業を踏まえて、独自の視点からの分析、考察を展開したもので、博士学位論文として十分評価に足るものである。

なお、本論文の一部は、いずれも以下の査読付の３論文としてすでに公表されている。

① 姜琦：「キットラーの理論の応用：メディアアートにおける実践、アーカイブ、および再生産」中国科学技術協会『科技伝播』第 2023-9 巻 81 頁-85 頁（2023）（中国語）

② 姜琦：「映像コンテンツのデジタル修復がもたらす社会性 中国アニメーション「天書奇譚」(1983) を例に」社会芸術学会『社藝堂』第 9 号 109 頁-134 頁（2022）

③ 姜琦：「メディアアートの異種混交的特性に基づく分類と再考察—参加型アートの焦点化」山西三晋報刊伝媒集団『文化産業』第 2023-11 巻 115 頁-117 頁（2023）（中国語）